
グリさんの店番

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリさんの店番

【Nコード】

N9254B

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

ここは動物の耳と尻尾を持った人達が住む世界。その世界のどこかにある雑貨屋のとある日のお話。

（前書き）

初・短編！です。

稚拙なものです。が楽しんで貰えたら幸いです。

それではじまりはじまり〜

ある所にとっても大きく、とても目付きが悪く、とても言葉遣いが悪く、とても怖いグリズリーのグリさんがいました。

グリさんは雑貨屋のカウンターで暇そうに頬杖をついていました。

「ヒマだ……」

グリさんはそれはそれは暇そうでした。

カウンターで隠れて見えませんが貧乏揺すりをしています。

暇なあまりにイライラしているみたいです。カルシウムが足りてないみたいです。

するとガラランガランと誰かが店に入ってきました。

「いらっしやいませ」

店員なら愛想良くしなければいけないのにグリさんには愛想のかけらもありませんでした。

「いやっほ」

やって来たのは犬のいーさんでした。ニコニコとうさん臭い微笑みを浮かべています。

グリさんは今まで以上に不機嫌そうになってしまいました。凄まじい不機嫌のオーラを放っています。

誰もがちびつてしまいそうなグリさんの様子も気にせずにいーさんはカウンターに肘を乗せて言いました。

「やつ、グリさん。冷やか

「帰れ、クソ犬」

即答でした。取り付く島もありません。容赦ありません。

いーさんは笑顔のまま凍り付いています。こんなににべもない扱いを受けるのはいーさんも予想外だったようです。

それにしても、客に対して

「帰れ、クソ犬」はあんまりですね。店員失格と言えるでしょう。でもグリさんにはそんなの気にした様子はありません。

「速やかに帰れ、雌漁りのクソ犬野郎」

「あははは、雌漁りなんて酷いなあ。僕はただすべての女子に平等なだけで……」

いーさんの言い訳をグリさんはバツサリスッパリと取って斬り捨てます。

「節操無しなだけだろうが」

「うっ……」

おや、いーさんが言葉に詰まっています。いーさんは本当にグリさんの言う通りみたいですね。クソと言われても仕方無いのかもしれませんが。

「帰れ、お前に構ってる暇は無い」

「そんな連れない事言うなよ」がうっ」

カウンターに入ろうとしたいーさんはグリさんのアイアンクローで止められました。

メキッメキッと危ない音が店内に響きます。かなり痛そうです。

「いたたたたたたたっ！」

痛がるいーさん。グリさんはアイアンクローをかけたままいーさんを持ち上げました。凄い力です。

グリさんはそのままいーさんを入口の方まで連れて行きます。いーさんは最初こそジタバタと抵抗していましたが、その抵抗はすでに尽きています。ブランブランと成すがままでした。

グリさんが入口まで行くと入口が開きました。

グリさんが開けた訳ではありません。かといって自動ドアという訳でもありません。

お客が来たのです。

グリさんはその事を分かっている筈ですがいーさんの頭を掴んだままです。ちゃんと仕事をする気があるんでしょうか？

とにかく入口が開きました。

その瞬間、いきなり金色の何かがグリさんに襲いかかりました。

「うおりゃあああああああっ！！！」

それはライオンのラーさんでした。ラーさんはグリさんを殴ろうとしています。

グリさんは飽き飽きした顔で手に掴んでいるいーさんを突き出しました。

ベゴツ。

鈍い音が響きました。ラーさんの拳はいーさんの顔にめり込んでいます。凄い威力ですね。

グリさんが手を離すといーさんはベシヤツと崩れ落ちました。

ラーさんがふつと笑います。

「流石はグリさんだなっ！」

嬉しそうなラーさんにグリさんはますます不機嫌になっています。

「何し来た獅子公」

グリさんの不機嫌そうな声にラーさんは爽やかに答えます。

「何かって？ 決まってるだろ、お前と闘う為だ！」

「違うでしょ！」

ラーさんをつっ込んだ声にグリさんの顔が引きつりました。どうしたんでしょうね？

グリさんがラーさんから視線を少しずらすとねこのねーさんがいました。

ねーさんはグリさんと目が合うとニヤリと笑いました。

その瞬間、グリさんは落ちていたいーさんをラーさんに投げ付けます。

「おっと、と」

そして、よろめいたラーさんを蹴飛ばして店から締め出してしまいました。

「ちょっと何すんのよー！」

締め出された事に怒ったねーさんがバンバンと店の扉を叩き始めました。

「うるせえっ！」

グリさんが叫ぶとねーさんは叩くのやめて最終兵器を呼び出しま

した。

「良い度胸ね……うーちゃん」
「はい」

ウサギのうーさんの声が聞こえてグリさんの顔が真っ青になりました。

どうやらグリさんはうーさんがかなり苦手な様です。
でも、聞こえて来た声はうーさんではありませんでした。

「グ、グリさん」

聞こえて来たのは今にも掻き消えてしまいそうな小さく可憐な声でした。これこそ対グリさんの最終兵器でした。

グリさんはさっきまでとは違って不機嫌そうな顔では無くて本当に困った様な顔しています。

小さく可憐なその声は続けます。

「私たち、グリさんの手伝いに来たの。だから、中に入らせて欲しいの。お願い、グリさん。それにこのままじゃお客さんが誰も入れないよ……」

グリさんは困った顔をばつの悪そうなにしてから溜め息を吐いて諦めた様に扉を開けました。

扉を開けると小さく可憐な声の持ち主であるねずみのマーさんが申し訳なさそうに立っていました。

その後ろにはいーさん、うーさん、ラーさん、ねーさんの四人がニヤニヤしながら立っています。何やらその笑いには悪巧みの匂いを感じる気がします。

「グリさん、ごめんなさい。私じゃ皆さんを止められません……」
「いや、気にするな」

グリさんは謝るマーさんを慰めます。いーさんやねーさんの時とは態度がまったく違います。何やら怪しいですね。いーさん達がニヤニヤと笑っているのもここに理由があるのかもしれませんが。

そんなこんなでマーさんやいーさん達はグリさんの手伝いをする事になりました。

でも、手伝う事など何もありませんでした。

お客さんもとんと来ません。ですから、グリさんとマーさんを覗いた四人はカウンターのグリさんの横でトランプをするという暴挙を始めました。

「ダウトやろうぜ！」

ラーさんが勢い良く言いました。ラーさんの意見に反対する声は無かったので四人はダウトを始めました。

その様子をグリさんはイライラと、マーさんは苦笑で見守っています。

しばらくするとお客さんがガランガランと入って来ました。

グリさんの無愛想な挨拶とマーさんの可愛らしい挨拶のコラボレーションでお客さんを迎えます。

「「いらつしや

「うがああああああああつ！！」」

突然、ラーさんが雄叫びを上げました。お客さんはびっくりして入るのをやめてしまいました。

グリさんは何が起こったのか分からず、四人の方を見ました。

「何故だ！ 何故勝てない！！」

どうやらラーさんはトランプに負けてしまったので雄叫びを上げた様です。

トランプはかなりの盛り上がりでねーさんはあっはははと、うーさんはニヤリと、いーさんはだっははと大爆笑です。

グリさんはこめかみをピクピクさせながらマーさんに言いました。
「まう、扉を開けっ放しにしてくれ」

「え、う、うん」

マーさんの本名はまうと言う様です。でもここではマーさんと呼びましょう。

マーさんは扉へ向かい、開けっ放しにしました。

グリさんはそれを確認すると笑ういーさんと悔しがっているラーさんの頭を掴みました。

「またアイアンクロー？ 勘弁してよ」

といーさんは言います。ラーさんはワクワクといった感じで言いました。

「お、なんだ勝負かつ？！」

ラーさんは血の気が多過ぎみたいです。

グリさんは怒りを押さえた静かで冷やかな声で言いました。

「お前らは一体何しに来たんだ……邪魔するなら帰れ！」

なんとグリさんはいーさんとラーさんを持ち上げて外に投げたのです。

扉の側にいたマーさんは驚いて小さく悲鳴を上げました。
二人を外へ投げたグリさんは狙いをうーさんとねーさんに定めました。

「ちよつ、ちよつとちよつと！ 女の子に手え上げる気ぎゅっ?!」
「グリさん、それは人としてさい……みぎゅっ！」

グリさんは二人に最後まで喋らせませんでした。うーさんとねーさんの頭がグリさんの手にガツチリとホールドされています。メキッという音が聞こえてるのでかなり力を入れてるみたいです。女性に手を上げるとは男の風上にも置けません。グリさんのそれはどうでもいいようです。

「いたたたたたたたたっ！！ お、鬼！ 悪魔！」
「つゝぶゝれゝるうゝ」

うーさんは全然痛そうには聞こえません。
グリさんはそのまま二人を店の外に連れて行きます。外に向かつてぶん投げる訳では無かったのですねーさんは内心ホッとしているようです。

そして、うーさんとねーさんは外に放り出されてしまいました。
グリさんは外の四人に自分が出来る限りの最高にドスの効いた声で言いました。

「今すぐ帰れ」

四人は顔を引きつらせて固まっています。グリさんはそんな四人を一瞥して扉を閉めました。

グリさんが扉を閉めると四人は顔見合わせてニンマリ笑ってハイタッチをしました。

店内にはグリさんとマーさんの二人だけです。

グリさんは商品の陳列をして、マーさんは掃除をしています。マーさんは何か言いたそうにグリさんをチラチラと見ています。

グリさんはマーさんの視線に気付いて振り向きしました。

「どうした、まう?」

「えっ、あ、う……そ、その、えーと……あう……」

マーさんは茹でた蛸みたいに真っ赤です。どうしたんでしょう? グリさんが首を捻るとマーさんは決意した様にグリさんを見ました。

「まう?」

「グ、ググググリさん! あ、あの、その……」

やっぱりマーさんの様子が変わります。もしかしてこれは『告白』というやつでしょうか、だとしたら青春ですね。素敵です。

「わ、私、グ、グリさんのこ、ことが、す、す、すすっ」

ガランガランと誰かがお店に入って来ました。女性のお客のようです。

マーさんはピタリと動かなくなっていました。

「いらっしゃい」

グリさんはやっぱり無愛想な挨拶です。子供も大人も泣いて逃げ出しそうなものですがお客の女性は気にした様子も無く、快活に挨拶を返します。

「やあ、やあ！ グリ君、今日は私にピッタリのナイスなネックレスをば見繕って〜」

お客はこの店の常連の狐のコンさんでした。

コンさんはこの店でアクセサリーを買う時はいつもグリさんに見繕って貰っているのです。

なので、グリさんは嫌な顔せずに対応します。

「なら、こんなんはどうですか？」

「おおっ、なかなか……。あつ、でも今度のデートは暖色系の服を着てくつもりなんだよね〜」

「そっすか、ならこっちのなんかどうです？」

「わおっ！ いいね〜、流石はグリ君！」

コンさんはバンバンとグリさんの背中を叩きます。

それにしてもグリさんとコンさんの距離はとても近いです。拳一握り分もあります。

カップルに見えなくもありません。

おや、マーさんのほっぺがフグみたいに膨れています。折角の可愛らしい顔が台無しです。嘆かわしいですね。

マーさんの視線の先にいるのはグリさんです。

グリさんはコンさんとの距離が近いだけで普通に應對しているだけですがマーさんアイにはグリさんとコンさんがイチャついてるように見えたのです。

そして、マーさんイヤーには先程の会話がこう聞こえたのです。

『コン、これなんか似合ってるんじゃないか？』

『おお、なかなか……。あ、でも次のデートの時は暖色系の服を着るつもりなんだよね〜』

『なら、こっちが似合ってるよ』

『わあっ、素敵！ 流石は私の愛しのグリ君ね！』

つまり、マーさんのこの膨れっ面はコンさんに対する嫉妬の表れみたいです。

「780円になります」

「ちよっと待ってね、えーと、はい」

グリさんは千円札を受け取り、手早く会計を済ませてお釣と商品を渡します。

「いや、今日も良い買い物したよ！ それじゃねーっ！」

こうしてコンさんは帰って行きました。

グリさんは陳列の続きをしようと棚に向かいます。

グリさんがふとマーさんの方を見ました。すると、

「っ?!」

グリさんは驚いて固まってしまいました。マーさんの膨れっ面はグリさんの予想の8キ口向こうを行っていたのです。

「ま、まっ?」

「はい、なんですか?」

マーさんはつつけんどんに答えます。

「何ですかっ……」

一体何が起こったのか分からないグリさんは首を傾げるばかりで

す。

「なんでそんな不機嫌なんだよ……」

「別に、不機嫌じゃありませんよ」

そうは言っていますがマーさんは相変わらず不機嫌な顔です。
グリさんはますます訳が分からなくなって首を傾げます。

「？ 一体どうしたんだよ、俺何かしたか？」

グリさんの問いにマーさんは答えます。

「さっきの女の人」

「あ？」

「さっきの女の人は誰？」

マーさんの声も表情も不機嫌なものではなく焦りというか悲しみ
というかそんな感じになっています。

グリさんは訳が分からずも答えました。

「常連さんのコンさんだが……」

「ほんとに？」

「当たり前だ」

「ほんとにほんと？」

「そうだ」

「ほんとにほんとにほんと？」

マーさんは必死です。可愛らしい女の子の必死な姿というのは良
い物です。和んでほんわか癒されます。

でも、グリさんは妙に食いつくマーさんにイライラしていました。

「くどいぞ、まう」

「あう……」

グリスさんのイライラした声がマーさんの心を滅多刺しにしました。

「だっ、だって……だっ……てえ……」

ボロボロとマーさんの瞳から涙が零れます。ボロボロ、ボロボロとその涙は止まる事ありません。

「……お……あ……ま、まう？」

グリスさんはもうオロオロするしかありません。グリスさんはただ単にしつこいのが嫌いでした。だからつい、あんな言い方になってしまったのです。それでもまさかマーさんが泣くとは思っていませんでした。完全に予想外です。

グリスさんは思います。『女はわからねえ……』、と。これを読んでいる男子の皆さんも少なからずそう思った事があるかもしれせんね。

話を戻します。グリスさんはもうとにかくオロオロするしかありませんでした。

「お、おい、まう」

「だっ……てえ、だっ……てえ……」

マーさんが泣き止む様子はまったくありません。

マーさんは『だっ……』の続きを言いました。

「だっ……て……グ、グリ、ひっく、さ、ひっく、がわた、私の

こ、事、えつぐ、きら……いに、なつちや、ひつぐ、た……て……」
「なんだそれ……」

グリさんはどうして自分がマーさんの事を嫌いにならないといけないのか分かりません。

でも、こんな時どうしたらいいかグリさんには分かりませんでした。ですからグリさんは少し悩んでからマーさんの頭を撫でてみました。

「あー、なんだ、その、嫌いじゃないから泣きやんでくれ」

マーさんは言われた瞬間グリさんに抱き付きます。その泣き顔をグリさんに押しつけます。

「お、おい、まう!？」

グリさんは困惑するばかりです。

またどうすればいいのかわからなくなっていました。
とにかくどうにかしなければと色々と考えますがどれもこれも微妙です。グリさんにはこの手の経験が皆無と言って良いほどありませんでした。

そこでふと思い至りました。グリさんはこれに希望を託します。

「ま、まう。そういえばお前、何か俺に言おうとしてなかったか？」

マーさんはガバツとグリさんから離れます。グリさんは一安心してからマーさんの顔を見て固まりました。

真っ赤でした。顔だけじゃなく頭のとっぺんから足まで真っ赤に見えました。

「ど、どうした？」

「へ、はわ、あ、おう、そ、その……あの……えーと、その……」

凄まじい動揺っぷりです。あまりの動揺っぷりにグリさんはマズッたなと思いマーさんの頭に手を乗せて言いました。

「あれだ、何か悪かったな。取りあえず落ち着け」

「はうっ！ ご、ごめんなさい……」

マーさんは恥ずかしさにシュンとしながら続けます。

「あの、その、色々とごめんなさい。ほんとに、その……」

「いや、だからいいって」

「あう、すいません……」

マーさんはそのまま押し黙ってしまいました。変な沈黙が流れま
す。

「……………」

「……………あう……………」

グリさんとマーさんは段々とこの沈黙に耐え切れなくなって来ま
した。

そして、もうしばらく沈黙が続いた後二人は口を開きました。

「あ、あのっ！」

「な、なあっ！」

同時でした。見事なシンクロです。なんとも恥ずかしい事態に二
人の顔が引きつります。

「~~~~っ、あーなんだ……お前から言えよ」

「へっ?! いや、あの……グ、グリさんからどうぞっ!」

なんだか青臭い春の香りがプンプンします。場所が場所なら素敵な事請け合いです! ああ、ここが夕日が差す放課後の教室とか体育館裏だったらよかったのにつ!!

はっ! 失礼しました。話に戻ります。

グリさんは少し照れ気味にマーさんに言いました。

「そ、そうか? いや、なんだ、その……なんだってあんなにしつこくコンさんと俺の関係なんか聞いたんだ? 言いたくなかったら言わなくてもいいけど……」

グリさんの言葉にマーさんは顔をまた赤くして固まりました。そして、しばらくそうしていたかと思うと何かを決心したかのようにうん、と頷いて真っ直ぐグリさんを見ました。

も、もしかしてマーさんはついにやってしまうのでしょうか?!

「グ、グリしゃんっ!」

「な、なんだ?」

マーさんは可愛らしく噛んだ事に気付かずそのまま一気に言いました。

「私っ、グ、ググ、グググ、グリさんの事が好きだからっ! だっ、だだ、だから、その、コンさんと仲良さそうにしてるのがそのえとあのあっ、嫌っていうか……そのえと……」

言いましたっ! 言っちゃいましたよ、マーさんっ!! いやあ

「うれし恥ずかし告白ですよ。」

あまりの爆弾発言にグリさんの頭がヒィィイトエンドッ……！
完全に機能停止状態で再び膠着状態になってしまいます。

「あ、あつ、その……ごめんなさいっ！」

マーさんは逃げ出しました。

「っ！」

その拍子に我に返ったグリさんは逃げようとするマーさんの手を
掴みました。

「待てよ、まう」

「あ、あの、さ、さっき私が言った事は忘れ……っ！」

マーさんはグリさんの顔を見て驚きました。グリさんはとても真
摯な顔でマーさんを見つめていたのです。

「まう、」

「は、はいっ！」

ほんの短い時間ですが沈黙が流れました。そして、

「俺も、お前の事が……好き……だ」

来ましたね、両思いですよ、両思い。素敵ですね。まあ、個
人的な意見を言わせてもらっただけで、夕日差す放課後の教室が体
育館裏が良かったですね。

これはさておきグリさんのこの告白はマーさんにとって目から鱗の出

来事でした。

マーさんは顔を真っ赤にしてグリさんにおずおずと尋ねます。

「ほ、ほんと？」

グリさんは恥ずかしそうにそっぽを向いて頷きます。

「あ、ああ」

マーさんは嬉しくなり過ぎてガバツとグリさんに抱き付きました。

「お、おい、まうっ!？」

「えへへ」

いやあ〜青春ですね……。もうすんごい羨ましいです。いやもうほんとバラ色の青春ですね。

マーさんは嬉しそうに笑い、グリさんがタジタジになっているとけたたましい音と共に店の扉が開かれました。

「ひゃあっ?!」

「な、なんだっ?!」

そこにいたのは、

「いやあー、グリさん格好良かったよ!」

「俺も、お前の事が……。好き……。だ」

「あっはははっ! うーちゃん似てるうっ!」

「グリさんっ、流石だなっ!」

「グリ君っ、格好良かったわよっ!」

いーさん、うーさん、ねーさん、ラーさん、コンさんでした。
誰もがニヤニヤとグリさんとマーさんを見ていました。

「え、何？ 何でみんな居るのっ?!」

「お、お前ら……一体いつから……、しかもコンさんまでっ」

グリさんがワナワナと震えながら尋ねるとうーさんが答えました。

「コンさんが店に入る少し前から」

グリさんとマーさんの顔が真っ赤に染まりました。

「なっ……それって全部じゃねえか……」

いーさんはニコニコとビデオカメラを取り出しました。

「グリさんとマーさんの勇姿はこれに納めてるから心配しなくても
だいじょーぶ!」

「……………」

おや？ グリさんが物凄い震えています。なんだかヤバイ空気が
漂い始めた気がします。そんなグリさんの様子に気が付かずになー
さんとラーさんは大爆笑です。

「あっははははっ！ しっかし見事に成功だったねっ、こりやも
う一部始終を町中に教えてあげないとねっ!」

「はっははっ！ グリさんっ、これでお前も愛戦士だなっ!」

わいわいガヤガヤとすっかり騒がしくなった店内でグリさんが只
一人物言わずに震えています。

なんとか袋の緒が切れそうなグリさん。マーさんは不安そうにグリさんといーさん達を見ています。

「あう、み、みんなそれ以上したら……」

マーさんが言った瞬間、グリさんの堪忍袋の緒がぶつつりと切れました。

「おい…… テメエラ……」

グリさんの恐ろしく静かな声が店内に響き、ラーさんを除いた全員が凍り付きました。

「ん？ どうしたんだみんな、固まつゴギヤフツ!!」

棚が飛んできてラーさんの顔面にぶつかかり、ラーさんはそのまま棚の下敷きになってしまいました。

投げたのはもちろんグリさんです。グリさんはブツブツと何かを呟いています。

マーさんは恐る恐るグリさんに声をかけます。

「グ、グリさん？」

「テメエーら…… ブツコロス!!」

グリさんは叫び手当たり次第に棚を投げます。

「わーっ！ グリさん、落ち着いてえゝっ!!」

「あっはははっ、グリさん怒っちガボオッ!!」

「ねーさんっ、いーさんがっ!!」

「うーちゃん、今それどころじゃないからっ!!」

「いやん♪ グリ君ったら恥ずかしがり屋なんだね♪」
「シニサラセエッ!!」

グリさんは暴れ、いーさんとラーさんは棚の下敷き、うーさんとねーさんは逃げ惑い、コンさんは高みの見物、そして店内は見るも無残な状態になっていました。

「うわーん! 誰かグリさんを止めて下さああああいつ!!」

マーさんの悲鳴が店内に響き渡りました。

さて、その後どうなったのかというと、店長さんが戻り、すべてを鎮圧しました。店長さんが鎮圧した後に立っていたのはマーさんと店長さんだけだったとか何とか。店長さん最強です。

それでは『エピソード?』です。

ある所にとっても大きく、とても目付きが悪く、とても言葉遣いが悪く、とても怖いグリズリーのグリさんがいました。

グリさんは雑貨屋のカウンターで暇そくに頬杖をついていました。

「暇だ……」

「もう、グリさん。バイトなんだからそんなこと言っちゃダメだよ」
「む、すまん」

グリさんの隣りにはとても小さく、とても温厚な目付きで、とても言葉遣いが優しく、とても可愛いマーさんことまうさんがいました。

「そうだ、この後暇か、まう？」

「えーと……うん、大丈夫だよ」

「よっし、なら飯でも食いに行かないか？」

「うん！」

今日も二人は幸せそうにこの雑貨屋の店番をするのでした。

お・わ・り

（後書き）

いかがでしたか？

どうも、「にっちもさっちも行かないを素で使う人始めて見た」と言われた雨永祭です。

あ、報告が遅れましたが『雨永』から『あめながまつり雨永祭』に変わりました！
よろしくです。

ところで、このグリさんの店番はどうでしたか？楽しんで貰えたらほんとに嬉しいです。

では、今日のところはこの辺で失礼します。

評価・批評・感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9254b/>

グリさんの店番

2010年12月18日02時59分発行